

本田増次郎と小泉八雲

— 「オリエンタル・レビュー」誌上での八雲への献辞 —

丹 沢 栄 一

Masujiro Honda's Tribute to Lafcadio Hearn
Focused on the articles in *The Oriental Review*

TANZAWA Eiichi

SYNOPSIS

Masujiro Honda was at various times a colleague of Lafcadio Hearn both at the Fifth Higher Middle School (at Kumamoto) and at Waseda University. In articles appearing in *The Oriental Economic Review* (later to become *The Oriental Review*) and in the form of a book review for a collection of correspondence entitled *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, edited by Elizabeth Bisland (Houghton Mifflin, Co. Publishers) Honda pays tribute to Hearn. Bisland herself comments that in those letters, most of which are addressed to Professor B.H. Chamberlain of the Literature Department at Tokyo Imperial University, Hearn, as a born letter-writer, gives straightforward opinions, sometimes emotional, sometimes partial, on a wide range of topics without any inhibition, thus revealing his innermost thoughts and feelings. Honda further discloses to us by introducing many individual episodes how Hearn is forced to shut himself away from the outer world in order to devote his time and effort to his writing. He does this all the while making a sincere effort to maintain a good relationship with his colleagues and the people around him and, moreover, serving conscientiously in his capacity of teacher to somewhat less than the best among his students. At the same time, Honda concurs with Bisland's view of Hearn: "[the fact] that he had some faults and some peculiarities only proves him to be like the rest of us." Hearn seeks the true, the good, and the beautiful with his insatiable intellectual curiosity, Honda assures us, in weaving together the diverse elements of his literary works as a prose writer.

I はじめに

熊本アイランド協会顧問・樋口欣一¹とは数年前に熊本の小泉八雲（以下、ハーンまたは小泉と略す）縁の地を訪れ、熊本におけるハーンについての話を伺って以来、文通を賜っている。氏はハーン研究に民族学アプローチを展開した丸山学²との交誼を得た。旧制中学時代の恩師・小山鬼子三³は八雲の早稲田時代の教え子であったが、八雲についての話を直接聞く機会がなかったことを残念がっておられる。また、ご母堂は本田増次郎⁴（以下本田と略す）の姪・本田駒子⁵に女学校時代に教えを受けていた。こうした機縁で、氏は本田と八雲に関心を持ち続けておられる。

ところで、本田は外務省の息のかかった「オリエンタル・レビュー」誌⁶発行に従事したことがある。樋口は本田が同誌に五高⁷と早稲田大学で同僚英語教師⁸であった八雲に言及にしているかもしれないとの期待感を持ち続けた。同誌が外務省の公文書館⁹に所蔵されている可能性がある、ある国会議員からの情報を得て、該当誌の調査を在京の小生に依頼されたのである。

本田は文武両道で敬愛した恩師・嘉納治五郎¹⁰の招聘を受け、五高（当時第五高等学校）の英語教師に赴任する。ハンナ・リデル¹¹とハンセン病患者救済のために「回春病院」設立に深く関わったことはよく知られるところである。後に大阪高等英語学校を始め、東京高等師範学校、立教女学校、東京外国語学校、女子英学塾、早稲田大学で教鞭を執り、ジャーナリストに転進して活躍する。

「オリエンタル・レビュー」誌は実は外交資料館には見当たらず、樋口の母校一橋大学図書館及び東京外国語大学図書館に Vol. II-III が、東京大学総合図書館に Vol. III が、国立国会図書館に Vol. I, II, III の全巻が所蔵されているのが確認された。調査の過程で、樋口の予想通り、本田の八雲評が「オリエンタル・レビュー」誌の前身「オリエンタル・エコノミック・レビュー」誌（1910年12月10日号）に掲載されていた。それは、ビスランド¹²編『ラフカディオ・ハーンの日本からの手紙』（以下『日本からの手紙』と略す）¹³の書評の形式をとった八雲への献辞である。

ハーンの作品の多くを出版しているホートン・ミフリン社¹⁴は、ハーンの元同僚でハーンの良き理解者であるビスランドに、没後の追悼企画として『ラフカディオ・ハーンの伝記と書簡』（以下『伝記と書簡』と略す）2巻¹⁵に引き続き、1910年、『日本からの手紙』の出版に踏み切った。まさに英断であった。ビスランドはこの序文で、恩人チェンバレン¹⁶、友人メイソン¹⁷、小泉セツ夫人¹⁸に宛てたハーンの手紙の本質を喝破し、彼の内面を吐露した書簡集を「書簡文学の傑作」¹⁹と絶賛している。ハーンは自製の効いた著作とは異なり、書簡の形で図らずも仲間うちに許される本音を公表することになるのである。

本研究ノートでは、*The Oriental Economic Review* 誌上の “The Japanese Letters of Lafcadio Hearn” 書評を素材に、本田の八雲観（特に熊本時代の八雲像）を紹介する。

Ⅱ 本田の書評訳文及び註釈

(註釈は本研究ノート文末に掲載)

書評

エリザベス・ビスランド編『ラフカディオ・ハーンの日本からの手紙』

ホートン・ミフリン社、定価3ドル

本田増次郎

『ラフカディオ・ハーンの日本からの手紙』は、当初「アトランティック・マンスリー」誌²⁰に掲載されたが、米国・英国・日本で絶大な関心を以って読み続けられている。作品の文学上の価値ないしはハーンの人柄を映し出すプロフィールを云々するのは、中国の格言にあるがごとく、蛇足となろう。故に、本書を読者諸氏に推薦する最上の方法は、評者のラフカディオ・ハーンに寄せる個人的な思い出を綴ることにあると思われる。私の回想が、通常は内に籠ったハーンの思考が忌憚なく吐露されている事実を解明する註釈の役割を果たすことを願うものである。

1905年のある日²¹の午後、東京の早稲田大学——大隈伯が創始者で総長——の教員室で、私はラフカディオ・ハーンの最後の姿を見かけ、いつものように挨拶を交わした。数時間後、日本を描いた散文作家・詩人は心臓発作のために帰らぬ人となった。ハーンは任用期間の切れた東京帝国大学を辞任後、英文学をその頃講じていた。東京帝国大学の文科大学が彼をこれ以上留任させなかったのは大きな過ちであったと思われる。しかし、どうやら双方に何らかの誤解があったようである。神戸でのジャーナリストとしての短い活動後、ハーンは東京に到着してからこの方、大学当局から正当な待遇を受けていないと絶えず感じていた²²。日本人講師としての給与しか支給されていなかったからだ。然るに、お雇い外国人は彼よりも遥かに若輩で経験不足にもかかわらず、ずっと上級の号俸を下賜されていた。この事実は、ハーンが日本人女性と結婚し、妻の小泉姓を名乗り、法律上日本国民になったからに他ならない。日本の法律は厳格そのもので、すべての官吏には明確に文言に規定された枠内で手当が支給される。間もなくハーンは辛抱にも程があると感じるようになり、任官契約終了時点で、大学を辞任する提案を行った。畢竟、大学への多大な貢献により自分がよもや反故にされることはあるまい、さらに、大学当局は給与増額の方策を講ずるものと目論んだのであろう。だが、学生にしても文科大学の方も彼の力量を十分認識するに至らなかった。

ハーンは英文学史を講じていることになっていた。しかし、彼ほどの想像力と創造性を兼ね備えた人物には、他のしかも昔の文学者に関わる日付・名前・生活状況を機械的にたどることは不可能事であった。彼の教室におけるすべての講義はハーン自身の機織で織り上げた英文学の錦であった²³。然るに、学生たちの英語および英文学の知識は不十分極まりなく、こうした絶妙な講義にさほど鼓舞されることはなかった。学生たちが比較してハーンの真価を認識し始めたのは、彼を永久に失ったときのことであった。

こうした状況のもとで、ハーンはこれまで以上に寡黙で交際嫌いにならざるを得なかった。彼が早稲田の同僚教師たちと対話する姿はめったに見られなかった。また、早稲田の学生は、東京帝国大学の学生同様、彼の話の真価を認めることはなかった。彼は他人が教室に参観に来るのを許そうとはしなかった。教室は自分自身の孤独な魂との共感を行う神聖な場所であった。彼は自宅にお客を受け入れることすら好まなかった。これは、心象を紡ぐ華奢な糸が他人との対話によって振れてしまうとの理由であった。ハーンには確かに何人か友人がいた。また、第三者が時折彼の教室に訪ねることは可能であった。イー・ピー・ヒューズ女史²⁴（南ウエールズのバリー在住で、イングランドのケンブリッジ大学女子師範元校長）は、幸運にも東京帝国大学の彼の教室に忍び込むことができた一人であった。ハーンはその時英文学及び日本文学に現れた月に関する講義を行っていた。ヒューズ女史は教室で耳にしたことやハーンとの短いやり取りを実に熱っぽく語ったものだ。ハーンは講演家でも大学教授でもなく、実際のところジャーナリストでもなく、散文作家であった。

ハーンと評者が同僚として邂逅したのは早稲田大学が最初ではなかった。遡る13年前の1892年²⁵、ハーンは熊本の第五高等学校（大学予科）に赴任した。私の採用はその半年前で、嘉納治五郎校長とは昵懇の仲であった私にはハーンがこの地位に就く経緯が明かされていた。ピー・エイチ・チェンバレン教授（日本に関する学問的な著書を著し、ハーンの数少ない無二の友人の一人）がハーンを嘉納校長に推挽していたのであった。彼はハーンの面貌だけが玉に瑕となりかねないと危惧の念を表明していた。嘉納校長は醜い顔つきが教授としての価値を損ねるそのような考えを一笑に付した。

この熊本五高の教員室は広々としていて、個々の机が三方の壁沿いに並べられ、中央に大きなテーブルが据えられ、その上に煙草盆と辞典が数冊置かれていた。ハーンと私は10分の休憩時間や昼食後の空き時間に隣り合わせに坐っていた。私ども日本人英語教師は学生と共に読み進めている本のことで、夥しい数の質問を浴びせたものだ。私が鮮明に記憶していることは、ハーンが「ユニオン第四読本」の多くの箇所を劣悪極まりない英語だと非難したことであった。同僚の日本人はハーンの文学作品から大いに恩恵を蒙っていたものの、彼の熊本の教え子たちは大学生ほど英語の実力が進んでいなかった。大天才が読本や会話の断片や、文章の文法構造を教えることは実に骨の折れる単調な仕事であったに違いあるまい。学生の年齢はさほど低くなかったし、また日本語による学習では初学生ではない。だが、こと英語の知識たるや実に不十分であったため、ハーンの真髓を幾分足りとも吸収することは確かに不可能であった。学生の一人は船での遠出²⁶を描写する際に、次のように言った。「吾ら8人の死体が川を漂っていった。」また別の学生は、「去る者日々に疎し」を頼りない辞書の手助けを借りて、「見えざる物は精神錯乱なり」と言い換えていた。

しかし、ハーンは男子学生たちに対する義務を誠実に且又大胆に遂行していた。もっとも、教え子たちはハーン先生が近視眼であることに乗じて、いやむしろ、先生が自分たちの良心の癒しであることが理解し得なかったために、西洋の大家の話や書を謹聴せずに、教室内で他の

雑事をするのに時間を費やしていたのであった。学生、同僚教師、それに和風の建物に電気が灯る都市そのもの²⁷ —これらがハーンにひどく應えたに違いあるまい、何しろ松江（ハーンが日本で中学校（男子高等学校）の英語教師としての仕事を始めた土地）の素朴で日本古来の生活様式や土地の人々に最初に心酔した後となつては。

以上の諸事情を勘案してみると、評者はハーンの熊本からの手紙に独自の個人的な感慨を抱かざるを得ないし、彼がわれわれの「生半可な」思想並びに刷新を率直に非難したことも好意的に容認できよう。同僚日本人教師が巻き煙草を吸っている一方で、ハーンはまるで日本の辺鄙な田舎者の郷土のように、煙草盆と長さ4寸ほどの赤銅の煙管を携えていた。西洋化した日本人がビールや牛肉に舌鼓を打つ一方で、ハーンは昼食に正門前の街道沿いの旅館に出かけ（五高は町外れの村にあった）、粹な半被姿の車屋や馬方たちと共にお銚子を傾け、何か酒の肴をつまんでいたものだった。ハーンは自宅では2、3尺の竹製の長煙管を6本脇に置き、交互に何回か燻らしていた。これはひんやりした煙草を喫う秘伝を日本人から会得していたからであった。

ハーンが嘉納治五郎校長（「柔道」と呼ばれる柔術の近代的体系の創始者）から「柔術」の精神的・道徳的側面についての話をいくばくかじきじきに伺い、さらに、五高の道場²⁸で日ごろの稽古を若干垣間見たのは、彼の熊本時代であった。彼の著書の一つに収められた「柔術」²⁹に関する一篇を読み、彼の視力がいかに弱かったか、また柔術に関する知識がいかに乏しかったかを思うにつけ、彼の想像力と描写力に目を見張らざるを得ない。このことはハーンが手掛けた他の全てに当てはまるものである。

ハーンの日本人妻は英語をさほど話さなかったし、彼の方も妻の日本語をほんの僅かししか解さなかった。従って、ハーン夫妻の睦まじさはそれ自体概ね阿吽の呼吸の所産であった。日本の古典を素材とする断片的な物語は、彼の教え子や協力者から不完全に伝えられたが、巨匠の手にかかり、増幅され、美化されたのであった。ハーンは思想に関わる事柄ばかりでなく、輪郭・形状・色彩に亘り、摩訶不思議な「心眼」³⁰を備えていた。これは彼の視力がさほど手助けとはなりえなかったからに他ならない。

横浜と倫敦を結ぶ日本汽船の英国人船長が或る時、日本人事務長を叱責する必要に逼られたことがあった。事務長は口返答するでもなく、涙を流すでもなく、ただ微笑するばかり。これが鈍感な英国船長のご機嫌を損ねたのは至極当然のこと。汽船が倫敦に入港すると時を移さず、船会社の支店ではこの不埒な事務長を即刻解雇する話が俎上に上った。日本人支店長は苦情を熱心に聞き入り、事態を速やかに調査する旨約束した。船長が支店を辞去するとすぐさま、支店長は日本人の笑いに関する一編³¹の入ったハーンの本籍一冊を船長宛て郵送した。一兩日後、件の船長は丁重なる手紙を支店長と事務長に送り、二人を自宅の食事に招いたのであった。かくして、ハーンは英国人と日本人とのより良い相互理解を齎す橋渡し役を演じたのであった³²。

熊本時代のある日、私はハーンにどのくらい日本に留まるつもりか尋ねたことがあった。

「いかなるものでも美しいものが存在し、それが見つかり、愛でていられる限り、私は滞在するつもりです³³」と、彼からの返答があった。

Ⅲ おわりに

本田の書評を兼ねたハーンへの献辞を一読して、達意の英文資料1に驚嘆する。大学教授として、英文寄稿家として、また英語演説家としての経験に裏打ちされた本田の面目躍如の感がある。ビスランド編『日本からの手紙』に収録された手紙の大部分は、チェンバレン宛資料4-(2)で、しかもその殆どが熊本時代に書かれた資料4-(1)点で、本田は元同僚として、まさに適任の評者と言えよう。

熊本時代のハーンの手紙には彼の苦悩、焦燥感、同僚や官僚批判などが菌に衣着せずに語られている。ハーンの「熊本嫌い(日本嫌い)」が強調される分、本田は緩衝器としての役割を果たし、同僚教師や地元熊本の人々との好ましい人間関係を紹介し、読者の誤解や曲解を払拭しようとしたのである。本田は編者ビスランドのハーン評(「彼には欠点や奇行がいくつかあったことは彼がごく普通の人間のものであったことを証明するにすぎない」)を徹頭徹尾擁護している。本田はキリスト教徒として寛容精神を発揮し、ハーンのすべてを受容し、異国の地から惜しまぬ献辞を送った。本田の語り口は実に温かい。本田は上記書評の他に、機会を見て「オリエンタル・レビュー」誌などにハーン関連記事資料2-2を掲載し、ハーンに賛辞を送り続けたのである。

本田は死の前年、1924(大正13)年の夏、姪の駒子と山陰地方への旅の途上、松江のハーンの旧居を訪ねた。万感の思いが去来したことであろう。

以上

(2002年11月5日記す)

追記

本研究ノートを作成にあたり、多くの方々のご支援を賜った。特に、樋口欣一氏からは本田並びに八雲に関する情報ばかりでなく、本稿執筆に際し貴重な助言を頂戴した。ここに深甚なる感謝の意を表明する。

参考文献

- 平川祐弘監修『小泉八雲事典』恒文社、2000年12月。
『ラフカディオ・ハーン著作集』恒文社、1980～1988年。
「英語青年」HONDA NUMBER, 第54巻第9号, 1926年2月1日。
「英語青年」本田増次郎追悼号, 第54巻第10号, 1926年2月15日。
『五高七十年史』五高同窓会, 1957年10月。
ジェーンズとハーン記念祭実行委員会『ジェーンズとハーン記念祭報告書』1992年7月。

小泉時, 小泉凡共編『文学アルバム小泉八雲』恒文社, 2000年4月。

中村浩路「本田増次郎」『岡山商科大学論叢』第36巻第1号〜第37巻第3号, 岡山商科大学, 2000年6月〜2002年2月。

長谷川勝政『知られざる本田増次郎』デジタルパブリッシングサービス, 2001年7月。

資料1

“The Japanese Letters of Lafcadio Hearn”

Edited By Elizabeth Bisland

(Houghton, Mifflin & Co., \$3.00 Net)

By Masujiro Honda

Lafcadio Hearn's Letters from Japan, as they originally appeared in the *Atlantic Monthly*, have been read with the keenest interest in the United States, Great Britain and in Japan. To comment upon their literary value or on the various side-lights they throw upon Hearn's personality, would perhaps be as the Chinese adage expresses it — supplying a serpent with legs. It is believed, therefore, that the best way of commending the book to our readers, may possibly be to recount my personal recollections of the writer, with the hope that they may serve as a commentary for interpreting these heart-to-heart revelations of his usually concealed thoughts.

One afternoon in 1905, in the professors' rooms of the Waseda University, Tokyo, of which Count Okuma is the founder and president, I had my last glimpse of Lafcadio Hearn and exchanged the usual “How do you do?” with him. A few hours later the prose poet of Japan was dead from heart-failure. Hearn was then lecturing on English literature, after leaving the Imperial University of Tokyo where his term of service had expired. It seemed a great mistake on the part of the College of Literature of the Imperial University not to have retained him longer, but apparently there was some misunderstanding on either side. From the time of his arrival in Tokyo, after a brief journalistic career in Kobe, Hearn constantly felt that he was not being fairly treated by the university authorities, for he was given only the native lecturer's stipend, while a foreign employee, even a man much younger in age and in experience, would receive a far larger salary. This came about because Hearn had become a legal son of Japan through marrying a Japanese woman, and assuming her family name of Koizumi. The Japanese regulations are very strict, and everyone in the government service is paid within limits clearly and definitely stated. Hearn soon felt that he had been patient long enough, and proposed to leave the college at the expiration of his term, probably believing that his invaluable services could not well be spared, and that the authorities would find means to increase his salary. On the part of the students and the faculty, however, Hearn's greatness was not sufficiently appreciated. He was supposed to be lecturing on the history of English literature, but it was impossible for a man of his imagination and originality to mechanically follow the dates, names and lives of other and dead writers. All his talks to his classes was [sic] of the brocade of English literature woven out of his own loom, and the students' knowledge of the English language and literature was too inadequate for them to derive much inspiration from these wonderous[wondrous] lectures. It was only when they lost him forever that they began to appreciate him by comparison.

Under these circumstances, Hearn could not but be a more reticent and retiring man than ever. He was seldom seen conversing with his colleagues at Waseda, nor were the students there any more appreciative of his discourse than had been those of the Imperial University. He would not permit strangers to visit his lecture room. It was the sanctum where he communed with his own lonely soul, and he even disliked to receive visitors at home, on the ground that conversation with other people might disturb the delicate thread of his image-weaving. Hearn did have a few real

friends, and a few other persons occasionally were able to visit his class-room. Miss E. P. Hughes (of Barry, South Wales), formerly head mistress of the Training College for Women, Cambridge, England, was one of those whose good fortune it was to steal into his class-room at the Tokyo Imperial University. Hearn was then lecturing on the moon as it appears in English and Japanese literature. Miss Hughes would be able to give us a most glowing account of what she heard there and of the brief interview she had with him. Hearn was not a lecturer or professor or really a journalist, but a writer of prose.

Waseda was not the first place where we were thrown together as colleagues. Thirteen years earlier, that is in 1892, Hearn came to teach in the Fifth Higher Middle School (Preparatory college) at Kumamoto. Appointed to the college half a year earlier than he, and being an intimate friend of its director, Jigoro Kano, the story of how Hearn was placed in this post was revealed to me. Prof. B. H. Chamberlain, who wrote several scholastic works on Japan, and who was one of Hearn's few appreciative friends, recommended him very highly to Mr. Kano, expressing only his fear that the writer's personal appearance might prove a drawback. Mr. Kano simply laughed at the idea of physical ugliness detracting from the value of a professor. The professors' room in this Kumamoto College was a spacious one, with individual desks arranged along its three walls, and a large table in the middle, on which tobacco trays and a few dictionaries were placed. Hearn and I sat next to each other during the ten-minute recesses and in after-luncheon leisure moments. We Japanese teachers of English used to ask a thousand and one questions from the books we were reading with the students, and I remember very well how Hearn denounced many passages in the Union Fourth Reader as utterly vicious English. His Japanese colleagues derived much benefit from his literary attainments, but his pupils in Kumamoto were less advanced in English than those in the universities. It must have been real drudgery for a great genius to teach the rudiments of reading, conversation and the grammatical construction of sentences. The students were not very young in age or in Japanese learning, but their knowledge of English was certainly too insufficient for Hearn to impart anything of his soul to them. One of them, in describing a boat excursion, said, "Our eight bodies floated down the stream." Another paraphrased "Out of sight, out of mind," with the aid of his treacherous lexicon: "The invisible is insanel!"

Faithfully and bravely, however, Hearn discharged his duties toward the boys, although the latter, taking advantage of the professor's near-sightedness, or, rather, using their inability to understand him as a salve to their consciences, would spend more time in doing other things in the class-room than in listening to their Occidental master. His students, his colleagues and the life of the whole city with electric lights in Japanese buildings must have tried Hearn sorely, after his first attachment to the simple and quaint ways and people of Matsue, where he commenced his career in Japan as a teacher of English in a middle school (Boys' High School). Appreciating this, his letters from Kumamoto must have a peculiar personal interest to us, and we can sympathetically excuse his frank denunciation of our "half-baked" ideas and innovations. While his Japanese colleagues smoked cigarettes, Hearn used to carry about a tobacco pouch and metal pipe five inches long, as if he were a country squire from a remote corner of Japan. While Westernized Japanese delighted in beer and beef, Hearn would for luncheon to a roadside inn (for the college was in a village outside the city) in front of the college gate, to get a drink of *sake* and a bite of something, in the company of picturesque carters and pack-horse drivers. At home he kept by his side half a dozen bamboo pipes two or three feet long, and took a few whiffs from each in turn, because he had learned from the Japanese the secret of enjoying cool smoke.

It was during his Kumamoto days that Hearn heard something of the spiritual and moral side of *jujitsu* direct from Director Kano, the founder of its modern system called *judo*, and also saw something of its daily practice by students in the college gymnasium. When we read his chapter on

jujitsu in one of his works and think how defective was his eye-sight and how meagre his knowledge of the subject, we cannot but marvel at his power of imagination and idealization, and this is true of everything else he handled. His Japanese wife was not much of an English speaker, and he knew very little of her mother tongue, so that their conjugal happiness was in itself largely a matter of silent appreciation. Fragmentary stories from the Japanese classic, imperfectly told him by his pupils or assistants, were amplified and beautified by his master mind. Not only in things of thought, but also with lines, forms and colors Hearn had a mysterious faculty of second-sight, for his first sight could not have helped him much.

The English captain of one of the Japanese steamers running between Yokohama and London had once found need for reprimanding the Japanese purser of the ship. Instead of retorting or shedding tears, the purser simply smiled, which naturally offended the blunt British sailor, and as soon as the vessel reached London, the immediate dismissal of this insubordinate employee was demanded at the headquarters of the steamship company. The Japanese manager listened attentively to the complaints, and promised to inquire into the matter at once. Upon the captain's leaving his offices, the manager sent him by post a copy of Hearn's book in which there is a chapter on the Japanese smile, and in a day or two, the captain wrote polite letters to the manager and purser, inviting them to dinner at his own house, Hearn thus being instrumental in bringing about a better understanding between the English and the Japanese.

One day while in Kumamoto I asked Hearn how long he was going to stay in Japan. His reply was, "I will stay as long as there is anything of beauty to find and admire."

--- *The Oriental Economic Review*, Vol.1, The Oriental Agency, New York, 1910, pp.43-45.

資料 2-1

The Oriental Economic Review 該当号表紙及びその一部

The Oriental Economic Review

A Fortnightly Summary of East Asian Affairs.

VOL. I
New York, December 10, 1910.
No. 3

The Oriental Economic Review

Published twice in every month, on the 10th and 25th days

Subscription: Single copy 10 cents; one year \$1.50. (Postage free within the United States postal limits.)

Proprietor and Editor.....MUTSUDA ZUMOTO

Associate Editors

Masujiro Honda and Tsunego Inaba.

Political Persecution Not Possible in Japan

Monarchy and democracy represent the two poles of the political stability of a nation. Either without the other, in one form or another, however disguised, can never satisfy the growing intelligence of the public consciousness. The Imperial House of Japan for more than two thousand years, has held its unique place in

“The Japanese Letters of Lafcadio Hearn”

EDITED BY ELIZABETH BISLAND

(Houghton, Mifflin & Co., \$3.00 Net)

BY MASUJIRO HONDA

Lafcadio Hearn's Letters from Japan, as they originally appeared in the *Atlantic Monthly*, have been read with the keenest interest in the United States,

founder and president, I had my last glimpse of Lafcadio Hearn and exchanged the usual "How do you do?" with him. A few hours later the prose

資料 2－2

The Oriental Economic Review, The Oriental Review 誌上の本田増次郎の小泉八雲関連記事

	タイトル・内容・出典巻数・ページ・署名の有無
1	“The Japanese Letters of Lafcadio Hearn” Vol. I December 10,1910 No.3 pp.43-45 署名あり。
2	The Kano School of Japan Vol. I January 10,1911 No.5 pp.93-95 嘉納治五郎と柔道の奥義紹介。署名なし。
3	本の紹介欄 Vol. I January 25,1911 No.6 署名なし。 ① Valuable Books on Japan の中にハーンの作品紹介あり。 Japan. An attempt at an interpretation. In Ghostly Japan. ② Description And Travel の中にハーンの作品紹介あり。 Glimpses of Unfamiliar Japan. 2 vols.
4	Concerning Lafcadio Hearn Vol. I May 25, 1911 No.14 pp.272-273 Mrs. Wetmore (Mrs. Elizabeth Bisland Wetmore) 日本訪問の際に、ラフカディオ・ハーンについて語った内容や、ハーンにまつわるエピソードなどの朝日新聞記事紹介。署名なし。
5	Japan’s Aspirations. Vol. I New York, September 25, 1911 No.22 pp.417-419 〔巻頭言〕武士道への言及、ラフカディオ・ハーンの柔術の例を引用し、日本がcosmopolitanismへの道をたどっていることを力説。署名なし。
6	American Youth a Leper Vol. II January, 1912 Number 3 pp.139-140 Miss Hannah Riddell’s famous leper hospital の紹介記事あり。執筆者は本田増次郎とみて差し支えない。
7	Review of Books Vol. II July 1912 Number 9 pp.560-561 に下記の紹介記事あり。 Lafcadio Hearn : By Nina H. Kennard (D. Appleton & Company.) Price, \$2.50 net. 約3分の1が The New York Times (1912年3月10日号のもの) の書評の引用。おおむね好意的な書評。
8	Vol. III December, 1912 Number 2 裏表紙の The Oriental Review Advertising Section Valuable Books on the Orient と題する本の紹介一覧に、以下の Lafcadio Hearn の著作が挙げられている。 Stories and Sketches of Japan. (Illustrated, 5 Vols.) By Lafcadio Hearn. 1. In Ghostly Japan; 2. Exotics and Retrospectives; 3. Shadowings; 4. A Japanese Miscellany; 5. Some Chinese Ghosts. Boxed, \$6.25 ; Separately.... \$1.25 署名なし。
9	Vol. III February, 1913 Number 4 pp.244-249 〔参考 The Principles Of Jujutsu By Professor Jigoro Kano 〔柔術と柔道の相違, ヨーロッパでは柔道の真髓が理解されていない, などに言及。〕 執筆者名に嘉納治五郎教授とあるが、本田増次郎の手になるものだろう。

資料 3

本田増次郎と小泉八雲の第五高等学校及び早稲田大学在職期間

	第五高等学校	早稲田大学
小泉八雲 (1850－1904)	自1891(明治24)年11月19日 至1894(明治27)年10月上旬	自1904(明治37)年3月9日 至1904(明治37)年9月26日 文学部出講
本田増次郎 (1866－1925)	自1891(明治24)年9月8日 至1893(明治26)年4月11日	自1904(明治37)年2月 至1905(明治38)年4月 高等師範部出講

資料 4

- (1) *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn* に収録された宛先人別書簡数

宛先人	チェンバレン	メイソン	セツ夫人
書簡数 (150 通)	118	15	17

- (2) 同・チェンバレン宛ハーン書簡差出地別 内訳

発信地	熊本*	横浜	神戸	東京	松江他
書簡数	105	3	2	3	5

【注】*5通のみが、熊本と差出地を明記している。(なお、発信日を記載している書簡は、ハーンの熊本滞在期間から推測。発信日の無いものは、ビスランドが編集の際に手紙を挿入した前後の手紙の日付を下に推定。)

¹ 樋口欣一 (1922-) 東京商大専卒。丸文書店代表・石光真清生家保存会発起人。編著書『ウラルを越えて』乾元社、1949 年。

² 丸山学 (1904-1970) は熊本の産んだ英文学者・民族学者で、ハーンの熊本時代を実証的に研究し、熊本におけるハーン研究の原点となる記念碑的な研究成果—「小泉八雲新考」『丸山学選集・文学編』, 古川書房, 1976 年。[講談社学術文庫, 1996 年]—を発表した。

³ 小山鬼子三 (1881-1954) 長野県出身。早稲田大学文学部卒。茨城県水海道中・熊本県人吉中教諭を経て、人吉高等女学校校長。定年後は熊本中学校英語嘱託。歌人・俳人。編著者『英国児童詩選集』文明書院, 1924 年。

⁴ 本田増次郎 *Oriental Economic Review* の副主筆。*Oriental Review* 主筆 (1910.2.25 ~ 1912.12)。長谷川勝政作成のホームページに本田増次郎の生涯と業績が詳述されている。

⁵ 中島こま [本田駒子] (1894-1983)。福岡県行橋町の京都高等女学校 (現・行橋高等学校) が最初の赴任先。

⁶ *Oriental Economic Review*. 10 Dec. 1910, pp.43-45. The Oriental Information Agency は「日本の財界の支援を得て、1909年8月に、日本および東洋の諸事情特に経済・財政事情等を周知する役割を以て設立された。」同機関発行の英文誌。1913年5-6月号で終刊。終刊の経緯については、伊地知純正『英文修業五十五年』研究社, pp. 95-96。

⁷ 九州の最高学府。今江正知「第五高等学校とハーン」, 熊本大学小泉八雲研究会編『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から』恒文社, 1993 年, pp.94-102。

⁸ ハーンと本田の在任期間は資料 3 参照。

⁹ 外交資料館 (THE DIPLOMATIC RECORD OFFICE OF THE MINISTRY OF FOREIGN AFFAIRS) 東京都港区にある。

¹⁰ 嘉納治五郎 (1860-1938)。教育家・講道館創始者・英文学者。市河三喜編『小泉八雲書簡集』研究社, 1925 年, pp.23-25 参照。

¹¹ ハンナ・リデル Hannah Riddell (1855-1932)。1890 (明治 23) 年、宣教師として来日。熊本で 1895 年回春病院を設立し、ハンセン病患者救済に尽力した。

¹² ビスランド Elizabeth Bisland (1861-1929)。New Orleans *Times-Democrat* 紙のハーンの元同僚で、ハーンの良き理解者。*The Life and Letters of Lafcadio Hearn*. [以下 *Life and Letters* と略す] 2vols Boston. Houghton Mifflin Co., 1906 年の編者でもある。

¹³ 『ラフカディオ・ハーンの日本時代の手紙』英文名は、*The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*. [以下 *Letters* と略す] First published in 1910 by Houghton Mifflin Co. Reprinted edition published in 1973 by Scholarly Resources, Inc. Wilmington, Delaware.

¹⁴ ハーンの来日第一作『知られぬ日本の面影』(1894 年) 以来、ハーンの多くの作品を出版しているポストン並びにニューヨークにある出版社。1922 年には画期的なハーン的全集 *The Writings of Lafcadio Hearn* 16vols.

を出版した。

¹⁵ Life and Letters. ハーンの死後、マクドナルドを中心とするハーンの友人や遺族、教え子たちによりハーンの経歴と書簡をまとめる話が計画され、ビスランドが編集したもの。

¹⁶ B. H. Chamberlain (1850-1935) 帝国大学文科大学博言学教授。『古事記』の翻訳で知られる碩学の日本学者。チェンバレンはハーンの良き理解者・精神的な支柱であったが、晩年はハーンと齟齬をきたした。平川祐弘『破られた友情』, 新潮社, 1987年。

¹⁷ William Benjamin Mason (1853-1923)。英国人お雇い外国人。1875 (明治8) 年来日, 工部省, 通信省, 旧制第一高等学校などで英語を教授した。

¹⁸ 小泉セツ (1868-1932)。小泉八雲夫人。八雲の良き理解者・協力者・語り手として, 八雲の再話文学を生み出す上で献身的な役割を演じた。

¹⁹ Bisland. Letters. Introduction, xxiii.

²⁰ ボストンで1857年に創刊された文芸雑誌で, ハーンは30篇を投稿している。

²¹ ハーンは1904 (明治37) 年9月26日に狭心症で死亡。

²² ハーンはお雇外国人教師ではなく日本人講師の資格であったが, 給与は外山正一学長の4000円 (年俸) を超える月額400円の破格の待遇であった。關田かをる『早稲田大学と小泉八雲』, 恒文社, 1999年, 第一章。

²³ ハーンの講義の内容については, 教え子たちによる, ハーンの東京帝国大学に於ける英文学史講義ノートに基づく『英文学史』 (北星堂, 1927年) の二巻に結実した。

²⁴ Elizabeth Philips Hughes (1851-1925)。イギリスの教育者・ケンブリッジ大学女子師範初代校長。ヒューズ女史に同行・案内したのは安井てつ (1870-1945) (東京女子師範教授, 後東京女子大学学長) であった。

²⁵ 実は1891年11月で, 本田の誤り。資料3参照。

²⁶ [参考] 樋口欣一は, ハーンのメイソン宛の手紙に球磨川下りを書き送っている事実を, 人吉地方・洞窟の修学旅行の記録『薩隈日肥行軍日誌』を調査し, その全容を紹介している。「くまもとフォーラム」1994年盛夏号, pp.13-16。

²⁷ 近代化の進む熊本に対するハーンの印象は好ましいものではなかった。西田千太郎 (1863-1897) [松江中学教諭, 校長心得] 宛 1891年11月30日付け手紙。市河三喜編, 前掲書, pp.21-22。及び1892年1月付け Ellwood Hendrick 宛て手紙, Bisland. Life and Letters I. p. 81。

²⁸ ハーンによれば, 「^{すいほう}瑞邦館」と呼ばれる, 一階建ての建物で, 百畳敷きの一部屋があった。井上智重「ハーンの面影」, ジェーンズとハーン記念祭実行委員会編『ジェーンズとハーン記念祭一報告書』1992年, pp.293-294。

²⁹ 柔術の紹介から, 日本文明と西洋文明の比較論まで広範・多岐に亘る本格的な日本論。『小泉八雲事典』pp.178-179参照。資料2参照。

³⁰ ビスランドは, “a seeing mind” なる語を使用している。Bisland. Preface. Letters xxxiii. [参考] 西成彦 (1955-) はハーン作品を読み解くキーワードとして聴覚の果たす役割に注目した。『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店, 1993年。

³¹ 『知られぬ日本の面影』1894年, 中に収録されている作品。日本人の微笑の真髓を, 「義務感, 古風な忍耐力と意思的な自己抑制」の極みと論じている。『小泉八雲事典』pp.442-444。なお, 太田雄三 (1943-) は「日本人の微笑の特殊性を強調しすぎる」と「日本人の微笑」の虚構性に批判的な論評を下している。太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像—』岩波書店, 1994年, pp. 198-206。

³² この英人船長のエピソードの前半部は「英米雑俎 (15)」1916 (大正5) 年10月15日号 *The Japan Times Students Edition* Vol.6-No.5 に, 「日本人のお世辞笑いが誤解を招く例として」, 本田は日本郵船会社の事務長が船長に叱責される話を取り上げている。

³³ 原文にある ‘anything of beauty’ の語句には明らかに, John Keats の (1795-1821) の「エンディミオン」Endymion (1818) の起句 ‘A thing of beauty is a joy for ever.’ の隠喩が見られる。